

人とトキが共生する島づくり 『エコアイランド佐渡』の実現

杉の巨木群が見守ってきた 佐渡の歴史・文化

歴史・文化・自然にまつわる観光資源の豊富なことで知られる佐渡市では、地元観光協会を中心に毎年数多くのツアーコースが設定されている。特にトキの放鳥が開始された平成20年以降、その主流の一つとなっているのが、トキの暮らす里を中心に佐渡の美しい自然景観を訪ねるエコツアーである。

それは後述する『エコアイランド佐渡』構想（人とトキが共生する島づくり）を目指す佐渡市の各種取り組みが、基幹産業の一つである観光産業にも如実に反映されている結果だが、エコツアーのラインナップにもう一つ、強力なアイテムが加わっている。

標高1000m級の山々が連なる大佐渡山脈にあって、5月から一般の入山が解禁（ただし1日16名限定）になる杉の巨木群やその周辺を訪ねるトレッキングツアーだ。

佐渡市の地形は「エ」の字を左肩下がりにした形に似ている。真ん中のくびれた部分（実際にはもっと太い）には豊かな穀倉地帯を形成する国中平野が広がっており、北側には大佐渡山脈が、南側には小佐渡山脈（600m級）がそれぞれ東西に横断している。

杉の巨木群といえば世界自然遺産でもある屋久杉が著名だ。樹齢3000年・4000年の屋久杉に比べれば、佐渡の杉の巨木群は古いもので樹齢1000年前後であり、比較的若いといえる。

しかし、樹齢1000年級でも風雪に耐え、数万本も残る佐渡の杉はやはりすごい。さらに大佐渡山脈の杉の巨木群の場合、つい4年ほど前までは存在すら一般に知られていなかった。その「発見」のインパクトは非常に強く、トレッキングツアーは毎回満員の盛況だという。

また佐渡といえば、トキとともに金山を連想する人が圧倒的に多いことだろう。佐渡が

の奥深さには、感嘆するしかない。

高野市長の話にあった佐渡金銀山の世界遺産登録への運動と併せ、佐渡市では地質学的観点から見た世界遺産ともいわれる世界ジオパークの認定、先進諸国では最初となる世界重要農業資産システム「GIAHS（ジアス）」（いわゆる世界農業遺産）の認定、すなわち3大世界遺産の登録・認定を同時に目指している。

この6月に世界農業遺産の今年の選考委員会が中国の北京で開かれ、先進諸国からは初めて佐渡市と石川県の能登半島が認定された。この認定が残り2つの世界遺産の登録・認定の足がかりになるだろう。

一見欲張り（？）な取り組みのように思われるかもしれない。だが実は、この3大世界遺産の登録・認定を目指す佐渡市の趣意書を検証すれば、それらすべてが深く連環していることが分かる。前述の天野尚氏の写真集『佐渡―海底から原始の森へ』というタイトルはそれを端的に示唆している。



水田で飛行し、エサをついばむトキ



洞爺湖サミット会場に展示された杉の巨木群 撮影 天野尚氏



たかのこういちろう 高野宏一郎 佐渡市長

産出する金についての最初の記述は『今昔物語集』とされる。『今昔物語集』の成立は平安時代末期（12世紀初期）だから、今から約1000年近く前ということになる。

「つまり、佐渡の金の存在が都にも知られ始めたところから、現在の大佐渡山脈の杉の巨木群は成長を始めたわけですよ」
そう語るのは高野宏一郎佐渡市長である。

「なぜ3つも同時に目指すのか？ 佐渡の島としての成り立ち、それは数千万年も前に大陸から日本列島が離れ、日本海ができて佐渡が海底隆起したというはるか太古の地球活動と深くかかわっているわけです。金山も原始の森も、その地球活動によってはぐくまれたものであり、農業を含めて現代に至る歴史・文化はその上に成立しています。それらを総合的に考えたなら、むしろ3つ同時に目指さないと意味がないと考えたのです」（高野市長）
付け加えれば、それは佐渡市が現在目指している『エコアイランド佐渡』構想（人とトキが共生する島づくり）とも大きく連環している。すべては地球活動の続きで、現代人の営みも途上の出来事なのだ。それらのダイナミックな時空を超えた環は、知れば知るほど、自然・歴史・文化の大いなる循環と表現しなくなってくる。

今回の佐渡市ルポの取材は結果的に、佐渡の奥深さの源泉ともいうべき、その連環の様相を訪ねる旅となった。

エコアイランド構想の誕生と大きな展開

佐渡市は平成16年3月、旧佐渡10市町村（両津市、相川町、佐和田町、金井町、新穂村、畑野町、真野町、小木町、羽茂町、赤泊村）による合併で誕生した。今回の「平成の大合併」において、新設合併で旧今治市（愛媛県）を中心とする周辺12市町村の合併で誕生した



佐渡の田園風景を代表する棚田の美しい景観



トキと人の共生を支える寄付金付き認証米のラベル



小学生に人気のビオトップ体験

『エコアイランド佐渡』構想(人とトキが共生する島づくり)の大きな特徴の一つとして挙げなければならぬのは、環境保全と経済の両立が図られていることだ。その両者がそろっているからこそ「共生」だという、非常に理想的かつ現実的なスタンスを兼ね備えていることだろう。その根底には、民間企業の起業・経営を幅広く体験してきた高野市長の広い視野と絶妙なバランス感覚が感じられる。

具体的には「朱鷺と暮らす郷づくり認証制

トキの暮らせる里づくりを支える認証米制度

マンの養成) 以上のように『エコアイランド佐渡』構想(人とトキが共生する島づくり)の人材育成面における取り組みの対象が、市民、事業者、行政マン、研究者など非常に広範であること、初級レベルから専門レベルまでその内容が充実していることが見てとれる。



北前船時代の記憶を濃厚に留める宿根木集落

全島一市の実現は佐渡の将来に不可欠と大方向の人が思いながらも、合併が難航したのは各地区の独自性が強いゆえだった。逆に言えば自然環境的にも人文的にも多様性が備わっているということである。一つの島の中でさまざまな個性が体験できるわけで、それは佐渡が観光客の人気を集める要因の一つでもある。

そのような各地区の個性を尊重しながら、なおかつ佐渡市が離島部のハンデいを克服し、単独市として経済的にも強い自立性を持つためには、市の将来を決めるに当たり全島が一致して信奉できる明確な「方向性」が必要だった。

高野市長は「その方向性を『エコ』に求め、そのための施策とするべく『エコアイランド佐渡』構想(人とトキが共生する島づくり)という概念を、佐渡市の新市まちづくり計画のストーリーガンとして提示したのです」と述懐する。『エコアイランド佐渡』構想(人とトキが共生する島づくり)が目指すのは、最終的に多様な生物が同居する『生物多様性のまちづくり』を実現するための仕組みの構築だ。そのために実施されている事業は多岐にわたっている。試みに人材育成に関する取り組みだけを取り上げても、次に列記するように非常に多彩である。

「トキがエサに困らないよう、田んぼや水辺にドジョウなどを増やす／農家の努力やビオトップづくりなどのサポート／トキの棲み家づくりとしての森づくり／トキのための各種ボランティア活動／佐渡におけるトキと人と自然の関係を学ぶ／全国にトキに関する活動の内容を発信し、遠くからでも応援していた」

●事業内容

〔1〕佐渡トキファンクラブ(トキの野生復帰を応援するサポーターづくり。平成23年5月9日現在で会員数3877人)

「トキの放鳥が近づいていたことと合わせ、認証米制度の推進にはそれ以前に乗り越えなければならぬ大きな障害がありました。佐渡で広く行われていた農薬の空中散布の廃止です」(高野市長)

佐渡の米栽培を象徴する風景は、今も各地に山間部・海岸部などに残る、棚田をはじめとする規模の小さな水田と、離島とはとても思えない広大な平野に展開する大規模水田だ。一概には言えないものの、自家消費のためと減農薬か、無農薬の水田が比較的多かった。それに対し大規模水田の多くは、合併前、あるいは合併直後もヘリコプターを活用した空中農薬散布が実施される例が多かった。

①生き物をはぐくむ農法により栽培された米
〔水田・水路に江の設置〕冬期湛水の実施
〔魚道の設置〕ビオトップと水田の連携のいずれかを実施)であり、生きもの調査を年2回実施していること

②農薬、化学肥料を5割以上削減して栽培された米

③栽培者がエコファーマーの認定(新潟県)を受けていること

④佐渡市で栽培された米であること

認証米は一般の佐渡米(コシヒカリ中心で、もともと魚沼産に次ぐ人気を得ていた)より

「基礎講座」トキの野生復帰の取り組みや地球環境問題などの基礎を学習／専門講座」専門分野についてより深く学び、自分たちでできることを考える／公開講座」著名な講師を招聘、市民の環境問題への関心と理解を深める講演会／連携講座」市民環境大学の目的に賛同する市民団体、NPO、大学、企業、行政等が実施する講座やシンポジウムなどへの参加」

●事業内容

〔3〕朱鷺の島環境再生リーダー養成ユニット(佐渡が有する豊かな自然環境と、シンボルとしてのトキとの共生を目指した環境への取り組みを基盤に、産官学が連携して人材育成と環境イメージのさらなる向上を図る)

「生物多様性創成サブユニット」循環型農業コース／自然再生コース」「生物多様性活用サブユニット」トキモニタリングコース(モニタリング専門家チームのスタッフ、環境調査員、レンジャーなどを養成)／エコツアーガイドコース(杉の巨木群などの自然を案内し、環境保護のためのレンジャー業務を兼務するプロガイド養成)／環境教育コース(佐渡の環境の特徴を子どもたちに分かりやすく伝える学校教員の養成)」「生物多様性推進サブユニット」環境行政コース(トキ野生復帰後の環境行政に取り組むため、環境関連行政に分野横断的かつ戦略的なプランニングを行える行政

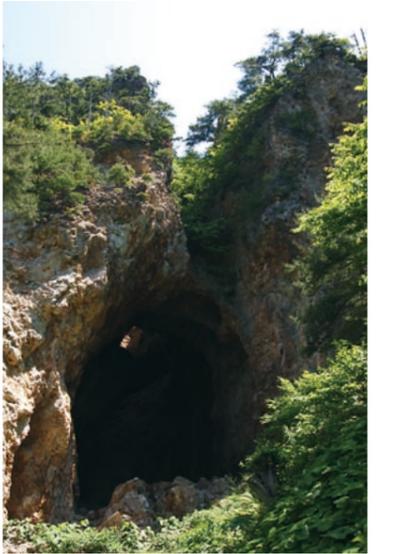
も価格が数%上積みされるが、その分がトキのエサをはぐくむ水田づくりへの寄付金となる仕組みだ。そして認証米は平成20年の発売以来、毎年完売が続いている。

「トキの放鳥が近づいていたことと合わせ、認証米制度の推進にはそれ以前に乗り越えなければならぬ大きな障害がありました。佐渡で広く行われていた農薬の空中散布の廃止です」(高野市長)

佐渡の米栽培を象徴する風景は、今も各地に山間部・海岸部などに残る、棚田をはじめとする規模の小さな水田と、離島とはとても思えない広大な平野に展開する大規模水田だ。一概には言えないものの、自家消費のためと減農薬か、無農薬の水田が比較的多かった。それに対し大規模水田の多くは、合併前、あるいは合併直後もヘリコプターを活用した空中農薬散布が実施される例が多かった。

それは農業の担い手の高齢化などによるものだが、平成11年に中国から新たなトキのペアが寄贈され、野生復帰を視野に入れた繁殖計画が発表されたところから、トキの餌場となるべき水田の農薬問題は危惧されていた。特に水田以外にも農薬が散布されてしまう恐れのある農薬空中散布は環境面全般にとっても大きな問題だった。

高野市長は前職の旧真野町長時代から、機会あるごとに農薬空中散布の廃止を訴えてきた。けれども農薬の空中散布は組合をつく



道遊(どうゆう)の割戸(われと)と呼ばれる佐渡金銀山・露天掘りの跡

て実施されており、さらに全島が一斉に止めるのでなければ意味もないことから、なかなか実行に移されなかった。

「これも全島一市になった大きな効果だと思われます。『エコアイランド佐渡』構想を策定し、全島を挙げてトキと暮らせる里づくりを推進していこうという共通認識が次第に高まっていったことにより、平成20年のトキの放鳥が始まる前には、空中散布の廃止がようやく実現できたのです」(高野市長)

佐渡市の水田は全体で約6000ha(実際には倍近くあるが生産調整されている)。平成23年5月末現在、認証米を栽培しているのは全体の約2割ほどだ。認証米生産農家は年収も若干増えており、農家の関心も高まりつつあるが、「むしろ3割程度で抑えておいた方が、希少性や全体のバランス感覚からいい」と高野市長は考えている。

いずれにせよエコを厳密に意識した認証米、しかもそれがトキの暮らせるまちづくり、人とトキが共生するまちづくりに役立っている



海底から隆起してできた佐渡誕生の秘密を物語る海岸線の景観

・認定を目指す理由(大地と親しむ観光Ⅱジオツーリズムなどを通して地域社会・経済発展に貢献し、大地の遺産を生かした佐渡の活性化に寄与する)

・ジオパークは島内10カ所のジオサイト(地質学的景観)で構成

・国内認定を平成25年度、世界認定を平成27年度を目指す

(3)世界農業遺産の認定

・認定を目指す理由(全国的に画一的な農業が組織的に導入され、佐渡にも導入された時代の後、トキを野生に返す運動に応じて伝統的な農業が復活。里山と密接な関係にある伝

るというバックグラウンドはマスコミ報道などを通じて、佐渡ブランド全体のイメージアップに役立っていることは確かだろう。認証米制度を基礎にした各種製品の認証制度は、今後、既に佐渡の名産品としての地位を得ている「おけさ柿」「シイタケ」などにも、少しずつ拡大していく方針だという。

なお『エコアイランド佐渡』構想に基づく環境維持・保全施策としては、次のような各種事業も実施されている。

- ①低炭素むらづくりモデル事業(農業関連施設の自然エネルギー導入により、低炭素だけでなく、設備改修や施設の機能集約、統廃合などによる省エネルギー効果を図り、温室効果削減にも役立つ)
- ②ごみの減量に向けた取り組み(スーパー・コンビニのレジ袋ゼロ運動、各種イベント時のごみ減量大作戦)
- ③新エネルギー導入事業(電気自動車などの導入および充電設備の設置、住宅用太陽光発電設備、小規模風力発電などへの助成、公共施設への太陽光発電設備導入など)
- ④バイオマスエネルギーの活用



スポーツイベントの際のごみも極力出さない工夫が凝らされる(佐渡国際トライアスロン)

統的な自然環境の知識と最新技術、政府の方針とも連携。環境に安全な農業の奨励と同時にトキの生息に必要な環境システムのモザイクを復元し、持続可能な農業を実現する

※平成23年6月11日に認定される

写真にあるように佐渡金銀山の山中には、往時の採掘の跡が等身大のジオラマともいえるべき状態で、ほぼ完全に残っている。また海岸線を走れば、数千万年前の盛んな地球活動の結果として海底から隆起してできた佐渡の「地質学的履歴」が一目瞭然に見られる。トキは平成20年9月の第1次放鳥(10羽)以来、21年9月(第2次19羽)、22年11月(第3次13羽)、23年3月(第4次18羽)と順調に野生復帰への準備が推進されつつある。途中、平成22年3月にケージがテンに襲われ、9羽のトキが犠牲になるアクシデントもあったが、順調に推移しているといっている。観光客も運がよければ、飛翔中のトキや、ドジョウやカエルがたくさん生きる水田でエサを漁るトキの姿を見ることができるようになった。



今秋オープンが予定される市民待望の佐渡総合病院



1日に210kmを自転車で走る人気イベント、佐渡ロングライド210



佐渡の食材を使ったご当地グルメとして人気急上昇中の「佐渡天然ブリカツ丼」

(取材・文 遠藤 隆)

- ⑤全ての防犯灯のLED化
- ⑥「エコだつチャリ」の利用促進(観光客向けレンタル電動アシスト自転車の導入により、島内の不便な2次交通を補助するとともに、環境にやさしい島づくりを推進)



近代になってからの金銀山・北沢浮遊選鉱場跡

佐渡の前に開ける多彩な未来像

3大世界遺産登録・認定を目指す、佐渡市ならではの世界的に優れた歴史的・地質的・景観的な「資産」をここで改めてご紹介していきたい。

(1)佐渡金銀山の世界遺産登録

・登録を目指す理由(発見されて1000年、本格的な採掘・製錬事業が始まって400年以上にわたり培われてきた遺跡、建造物、景観などが良好に保存されているため、人類が獲得した鉱山技術のほぼすべてを目の当たりにできる)

・これまでの取り組み(平成18年に世界遺産暫定リスト提案書を提出、翌19年に再提出。平成22年、世界遺産暫定リストへの記載が了承される)

(2)世界ジオパーク(地質学的世界遺産)認定

また、佐渡市ではこれらの資産を生かし、活力ある地域社会づくりを進めるため、大学の持つ知的・人的・物的資源を活用し、さまざまな大学との連携も進めている。地元の新潟大学とは平成20年に包括連携協定を締結するとともに、今年5月には寄附講座を設置した。

さらに佐渡市では、佐渡・新潟間の航空路線が今年の夏に再開され、今後の佐渡空港の2000m化の実現(非常時に使える余力を持たせ、人材の移動のバックアップ機能も果たす)を目指すと同時に、平成26年度中には北陸新幹線・新潟・金沢間開業も予定されている。「新幹線が延伸すれば佐渡へのルートも新潟港からだけでなく、佐渡への間口が大きく広がってくる」(高野市長)ことも期待される。離島部の生活安定に不可欠の航空路線復活への動きとともに、新幹線開業もまた『エコアイランド佐渡』構想を後押しする大きな力となるだろう。